

令和3年6月28日（月）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
議題（2）についての意見

戸田市教育委員会教育長 戸ヶ崎 勤

コロナ禍で授業時数や活動が制限される中、目の前の子供たちに必要な資質・能力の育成という教育の本質に立ち返り、全国の教師は知恵を絞ってきました。「機会あって学びなし」とならないよう、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」など、目の前の子供たちに必要な資質・能力を明確にして、育成することが重要だということを再認識したと思います。

古くて新しい課題として、「教科書を教えるのか」「教科書で教えるのか」との話があります。本制度が、授業時数ありき、教科書ありきではなく、目の前の子供に必要な資質・能力を育成すること、そのために子供たちや地域の実態に応じた教育課程のよりよい在り方を考え、教科等横断的な視点に立った教育課程や授業を構想する、教師の力量を高める制度として運用されることを期待したいと思います。

この特例を活用する学校は、教育委員会の適切なサポートの下、教科等横断的な学びや個別最適な学びの具体的実践ビジョンなどカリキュラム・マネジメント推進強化のロールモデルを示すことを期待します。また、全国の自治体や学校へ勇気や元気を与えるメッセージ性を高めたり、家庭や地域にも学校の目指す教育目標や本制度を活用する狙いを伝えたりするために、その教育課程等を公表する仕組みがあることを多とするとしたいと思います。なお、義務教育の質保証の観点からは、ある意味、日本のお家芸とも言える、年間の総授業時数の量的な確保の視点も併せて重要であると考えます。

今後は、子供や地域の実態に応じ、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成に向けた探究的な学習などを推進することも重要です。特に中学校にその必要を感じますが、一方で、特に大切なのは、削られたと感じる教科（削減ではなく移動や統合である）の教師や保護者の正しい理解を得るなど、様々な課題も考えられます。

さらに、「カリキュラム・メイキング」の考え方も大切であると考えています。教育課程の編成に関し、より多様で高次の教育課程の編成に向けて、各学校が自律的、可変的、動的に考え、運営し、見直していく自走のサイクルを実現するためには、さらに特例的な取組を推奨していく必要があると考えます。